「たった一人の新聞」

札幌テレビに出演の記

札幌テレビの有働チーフディレクターから出演依頼の電話があつたのは五日の夕方で、つぎの日には坂井ディレクターと広田カメラマンが撮映、録音器材などの大トランクをかかえて到着しました。

十二日のSTV「2時のワイドショー」に妻（みよ）と娘（絵里子）といつしよに生放送で—サブタイトルは「たつた一人の新聞」になるとのことで、放送中に流すフイルム構成のために三日間にわたつての現地取材となつたもので、筆者が工場で活字をひろつて版を組んで新聞を印刷するところ、家族との食事、電話をかけて取材に出かける風景、娘の運転で走る自動車、里見が丘公園に建設中のグリーンパークで長田専務との対談、下斗伏で脱穀作業中の道上太郎さん、配達された新聞を見入る塩幌の山岸利夫さん夫婦、上利別の鳴海一郎さん夫婦、にいつ旅館の新津幸助さん、[illegible]通りを歩く筆者、本別町議会議場での筆者—などなど

当日、札幌市北一条西八丁目の札幌テレビを指定の午前十一時に三人で訪れ、第十応接室に通されて玉木有働、坂井の各ディレクターが入れ替りに姿をみせていらつしやい、地下の職員食堂で昼食をすませてからこの番組の司会者の杉本紀夫さん、伊藤淳子さんと応接室で三十分ほど話し合つただけで特別の打ち合せもなく、しばらく三人でポツンと本番を待つていました

やがて午後二時近くになつてすぐそばのワイドショースタジオに案内され、写真のような格子に座つたところで、まばゆいライトのなかでテレビカメラを向けられ、おなじみのメロディに乗つて両司会者からこの朝の初雪談義やプレゼントのお知らせがあつて『ところでこの2時のワイドショーも早いもので十カ月となりました、マスコミに生きる人間として責任を痛感していますが、ミニコミの大切さもあり、ミニコミの魅力はキメのこまかい情報にあり—そこで今日のメーンコーナーは町の新聞人として情熱をかたむけているある一人の方をご紹介します』として、前記のフイルムが写し出されました。

画面、音楽とともにナレーターの声『松山明さん、五十八才は足寄町でとかち新聞を発行して、もう二十年近くになる、社長兼記者兼印刷工兼営業係—つまりとかち新聞は松山さん一人のミニ新聞である、林業と酪農のマチ足寄町、そして阿寒国立公園の十勝側玄関として知られている—タブロイド版二頁のとかち新聞は月三回の発行で二千部を出し、足寄を中心に本別、陸別の読者が読んでくれる、記事は当然町議会の動きや農業問題に重点がおかれる、どれも読者にとつて身近かなことばかり、それだけに取材にはなつとくのいくまで時間をかける、自分で調べ自分で考えたことをそのまま活字に移すのだから—メモから直接活字ひろいにとりかかり原稿はいらない、頭のなかの原稿を活字に託すのもたつた一人の新聞だからこそできることだ運転はいつも長女の絵里子さん—彼女はとかち新聞の貴重な足だ、今日は観光施設の取材—』

松山　大体この施設（グリーンパーク）は予定の十二月七日に—

長田専務　十二月七日にオープンです

松山　ファミリーランドとして子供の遊び場も—

長田専務　施設はここに残ることになります

松山　町の方針や計画を入れて勝手にやつてるわけではなく—

長田専務　ここは町の公園地帯ですから俗化することは絶対許されないんです

ナレーターの声『とかち新聞の創刊は昭和二十九年だが、昭和三十五年まではガリ版だつた—この年代物の印刷機を手に入れてからもう十三年、古い機械だがそれだけに愛着は深い—長男の千春君、次男の明人君は配達係、妻のみよさんにも苦労のかけつ放しだ、松山さんは空知の栗山生れ、生家はカジ屋だつたが隣りが印刷所だつた—文学少年だつた松山さんは自分の文章を活字にすることが大きなあこがれだつた、その情熱は衰えていない、ミニコミだけに読者の反響も敏感だ、それだけにたつた一人の新聞人の使命は大きい、ガンバレとかち新聞、とかち新聞バンザイ、新聞を刷りあげて配ると、またすぐつぎの取材にと駈けまわる五十八才の新聞人に休みはない、生きているとかち新聞に休みはない』

ここでスタジオの場面に戻つて

杉本紀夫司会者　とかち新聞二十年とりくんでいらつしやる松山さんにお越し頂きました、どうも遠いところを恐れ入りました

伊藤淳子司会者　いらつしやいませ

杉本司会者　それから奥さんのみよさんです

伊藤司会者　いらつしやいませ

杉本司会者　それからさきほどフイルムのなかでサツソウと車を運転をしていました長女の絵里子さん

伊藤司会者　ようこそ

杉本司会者　松山さん、そのミニコミということで地方紙にとりくむキツカケはどういうことですか

松山　結局、地方の町村といえども国の政治の縮図でございますからすみずみの町や村の政治がよくならなければその国の政治もよくならないということで、大体その町の議会に出ない問題は大した問題ではないという意味でなく議会がその町や村の動向を決めるできごとですから、それを中心に、選挙のときには町を真二つにわけて町長選、町議選で大騒ぎするが、あとは関心がないということではなんのための選挙かということで、その後の町村長や議会の動きを追跡しまして審判、判断のできるようにくわしく報道していく、そのことは現在、物価、公害、インフレといつても田中角栄さんになつてからではなく佐藤栄作さんも池田勇人さんの時代からもそうであつたので、それでもなおタタかれてもタタかれてもチツとも政治は変らない、それと同じように町も村のことも判新してそのつぎには正しい選挙をしてもらう、これが一番必要だと思いますし、全道百八十の町村に大きな新聞でも一人々々配置はできませんから、小さな新聞ですが大新聞には負けないつもりでやつています

杉本司会者　議会開会中はビツチリですね

松山　会期が長いと三日も四日も記者席で坐りづめということです、従つて私一人なもんですから朝、夜中に工場で仕事をすることになりますが、一人でやるからやり易いし、やらざるを得ないし、やり甲斐もあるということになるんです

杉本司会者　奥さん、そういうことではご主人は不規則ですね、健康の方はどうなんですか、ご主人は—

みよ　割合に丈夫なんですね、チヨツとした病気をしてもそのままつづけます

杉本司会者　ご主人が倒れたら休刊となりますからね、いまフイルムをみてますと活字を選んで組んでそれを印刷にかけてでしよう普通なら一人ではできないんでしよう

松山　大体、活字をひろう文選、版を組む植字工、印刷をする印刷工、それと解版工の四人が分業となつていて、そのことしか知らない方が多いんで、なんでもできる方はいないので私がみようみまねでやらざるを得なかつたわけです

杉本司会者　あのタブロイド版で活字は何本くらい使いますか

松山　大体一万字ですねそれを一本々々ひろつて埋めてまた一本々々戻すという作業はだれがみてもつまらないと思うんです

伊藤司会者　またあれ重そうですね

松山　組んでしまうとかなり重いんです

伊藤司会者　では腰を痛めたりなど—

松山　それで神経痛のような発作がおきたり油断はできません、休むと郵便法違反で認可が取消されるし—月三回以上出さないと選挙になると政治評論ができないという公職選挙法の規定があつて、シャニムニ三回以上出さないと新聞の資格がないんです

杉本司会者　お嬢さんはなにかお仕事をしていらつしやいますか

絵里子　自分で小さなスナツクをやつています

（以下次号へつづく）

主筆の室

○…へき地の貧弱な小新聞が近代マスコミの王座ともいうべきテレビに登場しようとは—これは頼んでも実現しないことで、これというのも二十年にわたつてこの新聞を支えて頂いた愛読者の方々のおかげで、活字を一本々々ひろいながらの手づくり作業にも力が入ろうというもの。

○…故郷の栗山を去つてから二十二年、松山はどこでなにをしているのか、といつた方々にはブラウン管を通して「足寄に松山あり」と具体的に近況報告の形。

○…ワイドショーの画面でおなじみの杉本さん、伊藤さんのお二人とも、画面以上に優しく丁重な方で、こちらのコーナーがおわると『時間が足りなくて…』と申しわけなさそうなごあいさつにこちらが返つて恐縮

○…なにしろヤリトリの打ち合せはなくぶつつけ本番なので、すべてその場のアドリブの応対で、懐しい旧友と対面もテレビのおかげ

○…番組がおわつてから五階のニュースタジオのそばでビデオにより一同の出演ぶりを再現してもらうなど、STVの方々の親切な心づかいに一同楽しいひとときをすごしたものですが放送がおわつたトタンに娘に億万長者から縁談の申し込みというハプニングもあつてオドロキ。

新柄婚礼衣裳
きものと帯は
㊈久保呉服店
足寄町　T二一四八

お正月のお飾り
〆縄　舞玉　御神酒口　神棚幕　飾り物
十二月二十日から元足寄劇場前で「歳の市」
むとう野菜店
足寄町南一区　T二七二二

カメラ　八ミリ　写真材料
上野カメラ堂
上野復興
足寄駅通り　T二五一二

新畳　表替　中古畳　フスマ張替
二段ベッド
敷物一式
マットレス
小林畳店
小林幸三郎
足寄町大通り山口整骨院前　T二四二八

家具と建材
信用は最大のサービス
技術と納期を誇る！
家具　建具　製造販売
住宅内装に新建材を！
佐藤家具建材店
足寄駅前　電話二三二一番

技術に生きる！
テレビ
ラジオ
レコード
ステレオ
—あらゆる電気器具—
有限会社
ミネ・デンキ
足寄町三笠通り　T 2642